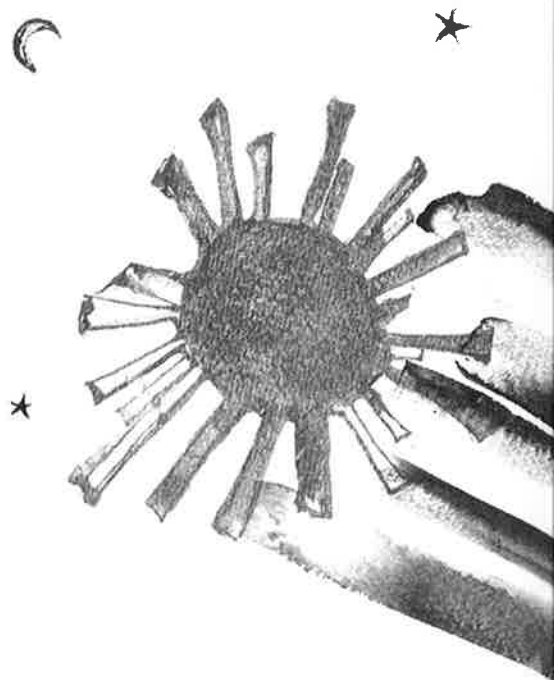


Introduction to Silvio Gesell
Why a currency with demurrage?

シルビオ・ゲゼル入門

減価する貨幣とは何か

廣田裕之



参考

ようになったのでしょうか。これには産業革命が大きく関わっています。

産業革命が起つたのは十八世紀のイギリスとされていますが、この時代にそれまでの紡績や製鉄などの産業が機械化され、大量生産が可能になりました。これによりイギリスで織物製品が大量生産されるようになると、この製品を売りさばく場所が必要になりました。また、産業が発展するにつれて綿や各種鉱物などさまざまな資源が必要となり、その資源の調達先として植民地が必要となりました。先ほどアヘン戦争の話をしました、この戦争も中国からお茶をたくさん買い入れていたイギリスが、アヘンなどイギリス側の製品を売り込むために仕掛けたものです。

また、南北アメリカ大陸やオーストラリアなどはまだ十分に開拓が行われておらず、ヨーロッパから数多くの移民を受け入れました。シルビオ・ゲゼル自身もブエノスアイレスに移民して一旗揚げたわけですが、この時代は他にもアメリカ合衆国やカナダ、ブラジルやメキシコなどさまざまな国が移民の受け入れを行っていました。ヨーロッパで貧しい生活を送っていた人たちが数多く南アメリカに渡り、広大な農地を手に入れて農業を始めていたのです。

今では考えられないでしょうが、日本もこの当時は数多くの移民を海外に送り出していました。当時日本の植民地だった台湾や朝鮮半島、そして一九三〇年代には満州（現在の中国東北部）に数多くの移民が渡ってゆきました。アジアだけではなく、ブラジルやペルーなど南米にも日本からも数多くの移民が渡っています（関東地方や東海地方などで働いていた日系ブラジル人労働者は、こ

です)。第二章ではドイツから新大陸への農業移民の話題も取り上げられますが、含めて世界各国でこのような移民がたくさん海を渡っていたのです。

マルクス主義（共産主義）について

また、特に若い読者の方には、『自然的経済秩序』の中でシルビオ・ゲゼルがたびたび批判するマルクスについてあまりご存じでない方もいるのではないかと思います。しかし、マルクスの思想は十九世紀から二十世紀にかけて世界に大きな影響を与えていますので、シルビオ・ゲゼルを理解するためにもマルクスについて知っておく必要があるでしょう。

カール・マルクス (Karl Marx、一八一八—一八八三) は、マルクス主義と呼ばれる政治潮流やマルクス経済学 (マル経) と呼ばれる経済学の基盤を作り出した人です。彼の代表作『資本論』は非常に分厚い本で全部読むだけでも一苦労ですが、この本の中でマルクスは、資本主義のさまざまな矛盾点を指摘しています。このマルクスの経済理論を研究する学問がマルクス経済学で、この理論を実際の政治で実現してゆこうという政治的立場がマルクス主義と呼ばれるものです。

先ほど産業革命が起きた話をいたしましたが、この産業革命によりイギリスなどヨーロッパ各地では工場が数多く建設され、そこで何万人もの労働者が低賃金かつ長時間の単純労働に従事しまし

た。工場などの現場で労働者がいくら頑張っても豊かになれず、食うや食わずのギリギリの生活を余儀なくされていた一方で、その工場の経営者は莫大な富を築き上げて裕福な生活を送っていたのです。

マルクスはこの状況を問題視した上で、その原因と解決策を提案しました。彼は労働者による労働そのものに価値があると考え、その労働の価値は労働者が単に生き永らえるのに必要な食料や衣服などの価値よりもはるかに多いものであるのにも関わらず、そのはるかに多い分〔剰余価値〕が経営者によって労働者から「搾取」されていると説明しました。

ちよつとわかりにくいので、具体的な数字を挙げて説明しましょう。たとえば、ある工場労働者が一ヶ月の労働で四十万円分の価値の原材料を百万円の価値の商品に加工した場合、この人の一ヶ月の労働の価値は六十万円となります。しかし、その六十万円のうち十二万円しかこの人が手にすることができなかった場合、残りの四八万円（剰余価値）は当然のことながら経営者の手に残ります（ここでは説明の都合上、税金や保険料などはないものとして考えます）。実際には彼の仕事により六十万円相当の価値が生まれているのですが、その価値の八割もが経営者に搾取されているので、この労働者は自分一人が生活するので精いっぱい給料十二万円しかもらえない構造があるのです。そしてマルクスは、経済が発展する仕組みを以下のように考えました。まず工業化が起きると、工場の経営者やその工場にお金を出している資本家など豊かな生活を送る市民階級（ブルジョワ）と、

その工場で低賃金長時間労働を行う無産階級（プロレタリア）とに分かれます。工業化が進むと社会全体としては豊かになります。その富を享受できるブルジョアと貧困に喘いだままのプロレタリアとの間での対立が激しくなります。やがてプロレタリアはブルジョワに対する革命（プロレタリア革命）を起こしてブルジョワとの闘いに勝利し、共産主義政権が樹立されるようになるということです。

プロレタリア革命が起きて共産主義になると、プロレタリアが自分たちの好きな政策を実施できるようになります。貧富の差が生まれる原因が工場という生産財の私有（すなわち一部の資本家による私有）にある以上、国がその生産財を持つようにすれば労働者に対する搾取はなくなり、労働者はそれぞれ本来自分が手にすべき所得（先ほどの工場労働者の例で言えば六十万円全て）を手にすることができるようになります。こうして労働者は自分たちの労働が生み出した価値を全て給料という形で手にすることができ、貧困に苦しむことがなくなる、というわけです。

シルビオ・ゲゼルがこのようなマルクスの議論にどのように反論したかについての説明は後の章に譲るとして、実際にはそのようなプロレタリア革命が最初に起きて政権を取るようになってからは、当時工業化の面で非常に遅れていたロシア（革命後はソ連）でした。また、第二次大戦後にはポーランドやハンガリー、ルーマニアなど東欧諸国が共産主義体制になりましたが、これはプロレタリア革命ではなくソ連による軍事制圧の結果です。他にも中国やキューバなどが共産主義にな

これからどうなるのか？

りましたが、工業化が進んだ国が社会主義になった例は歴史上存在しません。

さらに、共産主義では国家による計画経済が行われましたが、このために個人が自由に商売を行うことができず、人々の創造性が活用されなくなりました。また、共産党による一党支配が行われ、言論の自由もなくなり、政府に反対する人が逮捕されて拷問を受けることが少なくありませんでした。

このような息苦しい社会ではなくもつと自由を求めて東欧諸国では一九五〇年代以降たびたび民主化運動が起き、ついには一九八九年にはポーランドやルーマニアなど東欧諸国全てで共産党の一党独裁が終わりました。共産主義体制だった東ベルリンと資本主義体制だった西ベルリンを分断していたベルリンの壁が崩れ、東西ベルリンの人たちが出会ったシーンはその最たるものでしょう。中国は政治的には今でも共産党が支配を続けていますが、経済面では一九七〇年代末から改革開放経済を推進しており、今や共産主義とは言えない国になっています。そして一九九一年には共産主義の本国ともいえるソ連が崩壊してしまいました。今でも純粋な共産主義と言える国は、世界でも北朝鮮ぐらいのものになっています

資本主義について

このような共産主義の特徴については広く知られていますが、それに対して日本など世界のほとんどの国の経済体制である資本主義については、意外に知られていません。経済に詳しい人でも、資本主義と特に市場経済とを混同して議論していることが少なくありませんので、ここでは資本主義についても説明したいと思います。

市場経済とは、商品の提供者とそれを求める消費者が自由に経済活動を行うもので、たとえば誰でも自分の作ったお米やジャガイモやセーターなどを好きな値段で売ることができるような経済体制です。確かに共産主義の国では市場経済ではなく計画経済が営まれています。市場経済を営むには必ずしも資本主義である必要はありません。実際、市場経済自体は資本主義が生まれるはるか以前から存在していました。世界各地で定期的に市場を開いて、農家や漁師などが野菜や魚などを、時には物々交換で売り買いしていましたが、この市場こそが市場経済の原点です。

市場経済では、基本的に他の人たちが欲しがる商品やサービスを提供する必要があります。そのためには他の人たちが何を欲しがるかを見極めた上で、その需要を満たすような商品やサービスを作り出す必要があります。シルビオ・ゲゼル自身はこの市場経済の大切さを、「分業」という表現で述べていますが、パン屋さんはパン焼きに、漁師は魚釣りに、コメ農家は稲作に、大工は家の建築に集中することで、各人が完全に自給自足の生活をするよりもはるかに豊かな生活ができるようになることを示したのです。

この結果会社の経営者は、株主のための打ち出の小づちとして、できるだけ多くの利益を株主に提供すべく努力を重ねる必要があるわけです。そのため、自由に競争が行われている場合には商品価値下がりたり商品の質を高めたりして、消費者が気に入るような商品を提供しようとしています。

しかし、同じ資本主義企業でも権利を独占している場合にはそういう努力をする必要がありませんから、値段を吊り上げて利益を最大化しようとしています。たとえば、同じジュースでも街中の店では百五十円で売っているものが、山あいのホテルでは百八十円や二百円で売っている場合がありますが、これは街中から離れて競争相手がいない場所では、少しぐらい高い値段をつけてもお客さんは買ってくれるからです。そして、実際その値段でも我慢して買ってくれる人がいる以上、ホテルではその値段で売ること最大の儲けを手に入れることができます。

さらに、株が自由に売買されるようになると、今度はその株の値段が会社の評価としてみなされるようになります。つまり、株価が上がっている場合には資産価値のある会社として投資家から評価される一方で、株価が下がっている場合には経営陣に対して株主が責任追及を行います。そのため、経営者は常に株価を気にしながら経営を行い、株価ができるだけ上がるように努力するのです。

このようなことから、市場経済とは国家による計画に従うのではなく市場を通じて消費者の欲しがる商品やサービスを提供する経済システムであるのに対し、資本主義とは株主が出資した企業が、株主の利益の最大化のために活動を行う経済システムであるということが出来ます。もちろん資本

市場経済の場合、普通はさまざまな人が商品を提供できることから、そこで競争が起きて値段が下がります。たとえばパン屋さんが一人しかない場合、そのパン屋さんが値段をつり上げて儲けを増やそうと考えるでしょう。しかし、それだけパン屋が儲かると分かれば、他の人もパンを作って売り始めます（新規参入）。するとパン屋さん同士で競争が起きて、パンの値段が適正価格まで下がるわけです。このように、儲かると思った事業であれば誰でも始められるのが、市場経済の特徴です。

それに対し、資本主義とは資本のための経済活動のことで、十七世紀初めに創設された東インド会社が資本主義の原型です。この当時ヨーロッパでは日本や中国やインドなどアジア諸国との貿易に注目浴びていた一方、アジアまでの航海には莫大な資金が必要となるため、この資金を出してくれる人を募る必要がありました。そのため、航海のための資金をいろいろな人から募った上で、航海に無事成功して利益が出た場合には出資金に応じて利益を配当する仕組みができ、このシステムがその後発達して株式会社と呼ばれるようになったのです。

資本主義は、主に株式会社に代表される民間企業の活動を指します。企業は資金を出してくれた人たちに株を発行して渡し、株主はその会社の共同所有者となります。たとえば総発行株数が三万株の会社のうち六千株を持っている人の場合、その会社の五分の一を所有していると考えられるわけです。当然のことながら株主がお金を出すのは、その会社を通じて配当を手に入れるためですので、

主義以外の経済体制でも資本主義に見られるような利益追求主義は存在しますが、資本主義の場合にはあくまでもその会社で仕事をしている従業員ではなく、資金は出すものの会社で仕事を行うわけではない株主に経済的利益をもたらすためのものである点については、きちんと確認しておいたほうがよいでしょう。

また、農家や漁師などが野菜や魚などを直接売り買いする市場のように、株主≡資本主義がなくても競争に基づいた市場経済が成立する場合もあれば、他に競争相手がいないことから一本二百円の値段でもジュースが売れる山あいのホテルのように、自由な市場経済がなくても資本主義経済が成り立つ場合もあります。資本主義と市場経済は必ずしもイコールの関係ではないのです。